

〔D年〕復活節第5主日(2020年5月10日)

【旧約聖書日課】エゼキエル書 36章24～28節

²⁴わたしはお前たちを国々の間から取り、すべての地から集め、お前たちの土地に導き入れる。

²⁵わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。わたしはお前たちを、すべての汚れとすべての偶像から清める。²⁶わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。²⁷また、わたしの霊をお前たちの中に置き、わたしの掟に従って歩ませ、わたしの裁きを守り行わせる。²⁸お前たちは、わたしが先祖に与えた地に住むようになる。お前たちはわたしの民となりわたしはお前たちの神となる。

【使徒書日課】

ガラテヤの信徒への手紙 5章13～25節

¹³兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。¹⁴律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。¹⁵だが、互いにかみ合い、共食いしているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい。

¹⁶わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。¹⁷肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立し合っているのです。あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。¹⁸しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。¹⁹肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、²⁰偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、²¹ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのもです。以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。

²²これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、²³柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。²⁴キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。²⁵わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。

【福音書日課】

ヨハネによる福音書 15章18～27節

¹⁸「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。¹⁹あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。²⁰『僕は主人にまさりはしない』と、わたしが言った言葉を思い出しなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう。わたしの言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉をも守るだろう。²¹しかし人々は、わたしの名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするようになる。わたしをお遣わしになった方を知らないからである。²²わたしが来て彼らに話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが、今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない。²³わたしを憎む者は、わたしの父をも憎んでいる。²⁴だれも行っただけの業を、わたしが彼らの間で行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、その業を見たうえで、わたしとわたしの父を憎んでいる。²⁵しかし、それは、『人々は理由もなく、わたしを憎んだ』と、彼らの律法に書いてある言葉が実現するためである。

²⁶わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。²⁷あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

エゼキエル書 36章24～28節

²⁴私は諸国の民の中からあなたがたを連れ出し、全地から集め、あなたがたの土地に導き入れる。²⁵私があなたがたの上に清い水を振りかけると、あなたがたは清められる。私はあなたがたを、すべての汚れとすべての偶像から清める。²⁶あなたがたに新しい心を与え、あなたがたの内に新しい霊を授ける。あなたがたの肉体から石の心を取り除き、肉の心を与える。²⁷私の霊をあなたがたの内に授け、私の掟に従って歩ませ、私の法を守り行わせる。²⁸あなたがたは、私があなたがたの先祖に与えた地に住む。あなたがたは私の民となり、私はあなたがたの神となる。

ガラテヤの信徒への手紙 5章13～25節

¹³きょうだいたち、あなたがたは自由へと召されたのです。ただ、この自由を、肉を満足させる機会とせず、愛をもって互いに仕えなさい。¹⁴なぜなら律法全体が、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句において全うされているからです。¹⁵互いにかみ合ったり、食い合ったりして、互いに滅ぼされないように気をつけなさい。

¹⁶私は言います。霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。¹⁷肉の望むことは霊に反し、霊の望むところは肉に反するからです。この二つは互いに対立し、そのため、あなたがたは自分のしたいと思うことができないのです。¹⁸霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。¹⁹肉の行いは明白です。淫行、汚れ、放蕩、²⁰偶像礼拝、魔術、敵意、争い、嫉妬、怒り、利己心、分裂、分派、²¹妬み、泥酔、馬鹿騒ぎ〔別訳→酒宴〕、その他このたぐいのもです。以前も言ったように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません

ん。²²これに対し、霊の結ぶ実は、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、²³柔和、節制です。これらを否定する律法はありません。²⁴キリスト・イエスに属する者は、肉を情欲と欲望と共に十字架につけたのです。²⁵私たちは、霊によって生きているのですから、霊によってまた進むうではありませんか。

ヨハネによる福音書 15章18～27節

¹⁸「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前に私を憎んだことを覚えておくがよい。¹⁹もしあなたがたが世から出た者であるなら、世はあなたがたを自分のものとして愛するだろう。だが、あなたがたは世から出た者ではない。私があなたがたを世から選り出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。²⁰『僕は主人にまसारものではない』と、私が言った言葉を思い出しなさい。人々が私を迫害したなら、あなたがたをも迫害するだろう。私の言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉をも守るだろう。²¹しかし人々は、私の名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするようになる。私をお遣わしになった方を知らないからである。²²私が来て話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない。²³私を憎む者は、私の父をも憎む。²⁴誰も行ったことのない業を、私が彼らの間で行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、**その業を見て、私と私の父を憎んでいる**〔別訳→私と私の父を見て、憎んでいる〕。²⁵しかし、それは、『人々は理由もなく、私を憎んだ』と、彼らの律法に書いてある言葉が実現するためである。²⁶私が父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方が私について証しをなさるのである。²⁷あなたがたも、初めから私と一緒にいたのだから、証しをするのである。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・5月10日「復活節第5主日」の聖書日課主題は「聖霊の実」。「復活節」は、イースターから始まって七週間続くが、その途中で「昇天日」を経て、「聖霊降臨日」に続く。すなわち、「キリストの昇天」と「弟子たち(の教会)への聖霊降臨」へと向かう明確な方向性を持っている。

・「聖霊降臨」は、福音書・使徒言行録が繰り返し示しているように、前触れなく起こった霊的現象ではなく、主イエスの約束に基づいて弟子たちの身に起こった霊的経験である。すなわち、主イエスと弟子たちの信頼関係において、「聖霊授与」の約束を受けとめ、実際にその実現を確信するという、信仰のプロセスが重要な位置を持っている。弟子たちの教会にとって、主イエスの約束なしに聖霊降臨はありえない。その意味で、聖霊降臨は「信仰」であって、客観的「事実」ではない。そこで、「聖霊降臨」を祝う教会は、「復活」を祝う教会が「受難節」「受難週」における備えを最重視するのと同様に、「復活節」を通して主の約束の御言葉を聞き直すことで備えることを重視してきた。

・ところで、キリストの「昇天」は、ルカ福音書・使徒言行録に出来事として描写されていることに基づけば、復活から40日目のことである(使徒1:3)。しかし、他の福音書では、明確に出来事として伝えていない。マルコ福音書は、そもそも「昇天」や「聖霊降臨」を「復活」後の出来事として理解することに関心がない。マタイ福音書は、「復活」後にガリラヤの「山」の上で弟子たちに現れられて「大宣教命令」をされたという出来事によって、「昇天」を示唆している。一方、ヨハネ福音書は、「上げられる」という表現を多用しており、かつて御父のもとから来られた御子が再び御父のもとに戻られるという視点で「昇天」のイメージを持っているが、「十字架に上げられる」ことでそれが完成するという神学を明確に持っており(そのことは、「栄光」という言葉で表現される)、出来事としては時系列で示すことよりも、「復活」を含めた主イエスの出来事全体を「昇天」＝「栄光を受けるとき」として表現している。

旧約日課(エゼキエル 36章より)

・「エゼキエル書」は、旧約中「三大預言書」と呼ばれるものの一つ。預言者エゼキエルは、紀元前6世紀、南王国滅亡後のバビロン捕囚期に捕囚民としてカルデア(バビロン)に居た祭司の家系の人物(1:1~3)。本預言書の冒頭(1:1)に「第三十年の四月五日」という日付があるが、古代文書にしばしばあるように王の統治と結び付けられてはおらず、ただ2節「ヨヤキン王が捕囚となって第五年」という年代と結び付けられている。「第三十年」はエゼキエルが祭司としての任職を受けるはずの年齢(民数記4:30)であり、1~2章で描かれる幻はイザヤの召命記事(イザヤ6章)と類

似したケルビム(≡セラフィム)の描写が含まれていることから、エゼキエルが、捕囚地で祭司として任職を受けた際、または任職を受けるべきときを迎えたが捕囚地ゆえに正式な任職を受けられなかった際に、預言者としての召命を受け、預言活動を始めたことを示している、と解釈されうる(他の学説もある)。

・本預言書の構成は、預言者の召命物語(1~3章)、ユダ(南王国)滅亡に関する預言(4~24章)、諸国に対する裁き(25~32章)、エルサレムに対する見張りの役割(33章)、イスラエルの民の救済と復活(34~39章)、将来の新しい神殿建設の幻(40~48章)と区分できる。日課箇所は、この中の民の救済と復活に関する預言が重ねられる中の一部で、37章で告げられる「復活」預言に先立って、神の霊の授与による民の内的刷新(悔い改め)が促されている。

・25節「清い水」が振りかけられることによる「清め」は、宗教全般に広くみられる清浄儀式。旧約聖書では、出エジプト記で建設の指示がされている「幕屋」に関連して、幕屋と祭壇の間に「青銅の洗盤」が据えられて「清めの水」が入れられ、祭司らの清めに用いられていたとされる(出40:30~31など)。民数記(19章)には、清めの儀式に関連して、共同体の「罪を清める水」＝「清めの水」が用いられることが告げられている。エゼキエルは祭司であったので、おそらくこの共同体の罪の清めに用いられる「清めの水」のことを知っていたであろう。特に民数記では続く章(20章)に「メリバの水」の逸話が伝えられており、「罪」の問題は、社会正義に関する問題といよりも、神に対する反抗・不信頼という態度の問題として認識されているので、エゼキエルの預言の文脈によく沿っている。

・26~27節「新しい心」が与えられることが神の「霊」の授与と共に語られ、それによって神の「掟に従って」歩むようになるとされるのは、詩編51章(特に12~15節)に見られる。詩編51編は、「預言者的詩編」と呼ばれる詩編50編に対する応答と理解される詩編で、これらの詩編と預言者的伝統との関連を示唆。

・28節「お前たちはわたしの民となりわたしはお前たちの神となる」は預言の定型句(エゼ11:20、14:11、34:11、37:23など)。

使徒書日課(ガラテヤ5章より)

・「ガラテヤの信徒への手紙」は、使徒パウロが自らのバルナバに同行した宣教旅行で創設にかかわったガラテヤ地方の諸教会に宛てた書簡。「ガラテヤ」で示す正確な地方や都市は不詳だが、当時、ローマ帝国の行政区に「ガラテヤ州」が設けられているほか、ガリア系で「ガラテヤ人」と呼ばれる民族の存在が知られている。「ガラテヤ人」は、ローマ帝国支配下でもガリア系言語を保ち続けていたとされ、文化的独自性を維持しながらローマ帝国に服従していた。パウロが、この地方の教会に自分たちより後に入った宣教者ら

がユダヤ主義的な立場で異邦人キリスト者にも割礼をはじめとする律法遵守を求めたことに対して異議を唱え、「律法の実践」によって「ユダヤ人らしくなること」が不要であるばかりか、自分たちが伝えた「自由をもたらす福音」の意義を反故にしかねないこと、「イエス・キリストに対する信仰(または、「キリストの信仰」←聖書協会共同訳参照)だけが「自由をもたらす福音」であることを、激しい口調で述べている。

・日課箇所は、主要な主張を述べ終えた後に、一呼吸置いて(少し冷静さを取り戻して!)、読者に受けとめてもらいたい要点を整理し始めた箇所。「霊」と「肉」との対立として事柄をとらえ、「霊の導きに従う」者としてのキリスト者のあり方を描き出している。

・「霊(Pneuma)」と「肉(Sarkos)」を二元論的に対峙させるのは、パウロ書簡の特徴。パウロは、これらを物質的・実体的な事柄としてではなく、人が自分の拠るべき存立基盤をどこに持つかということの根本的な違いとして用いており、「霊」は神の基盤を持つこと、「肉」は人間自身に基盤を持つこととして区別する。

福音書日課(ヨハネ 15章より)

・日課箇所は、主イエスと弟子たちが共に過ごした最後の晩の食事の席(からオリーブ山へ向かわれた道すがら)を場面として、主イエスと弟子たちとの間で交わされた対話と教えの中の一部。15章前半には、有名な「ぶどうの木」のたとえが置かれているが、直前の14章末に「さあ、立て、ここから出かけよう」という言葉が置かれていることから、食事をした家からオリーブ山へ向かう途中、ぶどう畑を横切りながら語られた教えとして設定されていると見ることができる。

・ここでは、弟子たちがいずれ主イエスと同様の者として迫害を受けるということが告げられている。その根拠として、主イエスと弟子たちが「世に属していない」という表現がされている。「世に属する者」と「世に属していない者」とを対比させ、自分たちの特異性を強調することは、ヨハネ福音書全体で見られ、迫害されることの理由とされている。このような二元的視点は、パウロの「霊」と「肉」で示される視点と近似している。パウロは、そのときに「霊」に拠って立つ者は「イエス・キリストのものとなるように…召されて聖なる者となった」(ローマ 1:6~7)という「選び」を強調するが、ヨハネ福音書も同様に、「わたしがあなたがたを世から選び出した」(19節)と「選び」を強調する(日課箇所の直前 15:16にも同様の言葉がある)。この「選び」についてのいわば保証として、ヨハネ福音書は、弟子たちに対する「聖霊授与」の約束が語られるのである。

・ヨハネ福音書で「聖霊授与の約束」は、すでに14章から「弁護者を遣わす」(14:16)という表現で示されていた。「聖霊」は、ヨハネ福音書ではもっぱら「弁護者」という位置づけである。この「弁護者」と訳される語は「パラクレートス」で、日課箇所 26節でも繰り返されて

いる。「パラクレートス」は、「慰め・励まし」を意味する「パラクレシス」が人格化した語。パウロは、この語を名詞でも動詞(パラカレオー)でも多用している。元々は「傍らに(パラ) + 呼ぶ(カレオー)」が原義。ヨハネ福音書は、この「パラクレートス(弁護者)」を「証しするもの」すなわち「証言者」として示しており、「心理の霊」を授与することによって、キリストに選ばれた弟子たちが、キリストについて、キリストと同じ言葉と行動をもって示し始めるようになるかと理解している。

・ヨハネ福音書では、この弟子たちへの聖霊授与は、地上を歩まれた主イエスが弟子たちの前から離れ去ることと引き換えであることが強調されている。すなわち、弟子たちが聖霊を授けられてキリストの証人として歩み始めるためには、主イエスの死と分離が必要であると考えているということである。実際、弟子たちが聖霊を授与される場面は、20章の復活顕現伝承の中に置かれているが(20:22)、その顕現描写にもかかわらず、ヨハネ福音書は主イエスが「神である方のところへ…上る」から、すがりついてはいけぬ(離れなければいけない)ということを強調している(20:17)。これは、ヨハネ福音書が繰り返す、御父から派遣される御子、御子から派遣される弟子たち、という関係こそが両者・三者の一致を逆に示しているという理解に基づいているのだろう。

来週の誕生日 (5月10日~16日)

山室謙、鈴木宏幸。

主日礼拝の讃美歌から

・21-521 番「とらえたまえ、われらを」(= I 344「とらえたまえ、わが身を」)は、20世紀米国長老派牧師 W.フォークスの作詞、同じく長老派牧師の C.ローファーの作曲。ローファーが1918年のある会議の最中に書いた曲にあわせて、フォークスが青少年向き讃美歌として作詞。日本語版は1954年『讃美歌』から。

21-521「とらえたまえ、われらを」

Take Thou Our Minds, Dear Lord

1. Take Thou our minds, dear Lord, we humbly pray,
Give us the mind of Christ each passing day;
Teach us to know the truth that sets us free;
Grant us in all our thoughts to honor Thee.
2. Take Thou our hearts, O Christ, they are Thine own;
Come Thou within our souls and claim Thy throne;
Help us to shed abroad Thy deathless love;
Use us to make the earth like heaven above.
3. Take Thou our wills, Most High! Hold Thou full sway;
Have in our inmost souls Thy perfect way;
Guard Thou each sacred hour from selfish ease;
Guide Thou our ordered lives as Thou dost please.
4. Take Thou ourselves, O Lord, heart, mind, and will;
Through our surrendered souls Thy plans fulfill.
We yield ourselves to Thee—time, talents, all;
We hear, and henceforth heed, Thy sovereign call.